

# 伊藤三弥（謙吉）に関する一考察

一天誅組志士、政治家、実業家—

村 瀬 典 章

## はじめに

伊藤三弥は天誅組に参加して、のち政治家として、また実業家として活躍した人物である。しかし、その人物評価についてあまりされていない。それは隠された経歴のためもある。今回その謎に秘められた部分を少しでも解明し、伊藤三弥の経歴を探ることによって再評価の手掛りになればという目的で考察する。

伊藤三弥については、史料が少ないことや、三弥についてその存在自体を否定する人もいたこともあって研究自体が少ないが、そのなかで、『刈谷市史』第二巻で、伊藤三弥が松本奎堂と宍戸弥四郎とともに刈谷出身の志士として天誅組に参加したことが紹介されている<sup>(1)</sup>。松吉武雄氏は天誅組を早期脱走した隊士として、伊藤三弥と市川清一郎をあげ、三弥の経歴を紹介している<sup>(2)</sup>。山田孝氏は、今まで刈谷で伊藤三弥について語られてこなかったことに言及するとともに、「伊藤謙吉氏伝」から三弥の経歴を紹介している<sup>(3)</sup>。そのうえで、天誅組の挙兵失敗以後の伊藤三弥の活動を明らかにすることが課題で、特に岩倉具視との関係を中心にした明治維新をむかえる動きの中での三弥の活動の内容とその評価をすることが明治以後の三弥を見る上で重要となると指摘している。また、竹中兼利氏は、『岩倉具視関係文書』に残る伊藤三弥

の書状から岩倉具視との関係を紹介し、その関係は相当緊密な関係であったと指摘している<sup>(4)</sup>。

なお、伊藤三弥はいくつもの変名を使い、最後は伊藤謙吉の名前で活動しているが、本稿ではなるべくその時期を尊重して三弥と謙吉を使い分けることにする。

## 1 伊藤三弥の経歴

伊藤三弥が掲載された人名辞典は少ないが、『明治人名辞典Ⅱ』上巻には次のようにある。

### 資料1

伊藤謙吉

君は三重県の人、天保七年三月伊予国津市玉置村に生る。曾て鉱業に従事し、又三重県書記官となり従六位勲六等に叙せらる。明治二十三年十一月三重県第四区より撰はれて衆議院議員となり第五議會解散後之を辞し、後歌舞伎座株式会社取締役会長、太田鉄道株式会社取締役、株式会社（社脱カ）神戸商品取引所監査役たり<sup>(5)</sup>

この表記には明らかな間違いもあるが、これはあとで指摘する。

また、『議會制度百年史（衆議院議員名鑑）』には次のようにある。

## 資料 2

伊藤謙吉 三重県第四区選出 無所属  
 天保7年2月生・兵庫県出身○判事となり、  
 佐賀、徳島各始審裁判所長となる、内務書  
 記官、三重県大書記官を歴任す、のち高知  
 県寒川鉦山を経営、東京歌舞伎座（株）社  
 長、東京株式取引所理事となる○当選二回  
 （12辞）○大正6年2月24日死去<sup>(6)</sup>

一番詳細に書かれているものに、『新編愛  
 知県偉人伝』がある。

## 資料 3

伊藤三弥 出生地 碧海郡刈谷町城郭内  
 生年月日 天保七年二月二十四日  
 歿年月日 大正六年二月二十四日  
 三弥は刈谷藩士にて、父は庄兵衛保秀、幼  
 年にして藩費文礼館に学び、松本奎堂の教  
 授を受け、後青年となりて尾張の儒者伊藤  
 両村の塾に遊び、十七歳にて上洛し、頼三  
 樹三郎の塾に学び、京都の情勢を知り、勤  
 王の大義を重んじた。安政六年七月妻いと  
 を娶り、此の年父の死に遭ふや、刈谷を立  
 退きて上京し、妻は豊岡大蔵卿随資に仕へ、  
 三弥は岩倉具視が岩倉村に蟄居の時、岩倉  
 邸に仕へて、志士との連絡役をして居た。  
 文久三年大和天誅組の義挙に加はり、武器  
 方の役を勤め、奎堂の画策を補佐して居た。  
 義挙勝算なかりしかば、奎堂の内命を受け、  
 京都に逃れ帰って、同志に戦況を報告し、  
 奎堂の遺志を伝達した。爾来岩倉邸に潜伏  
 して、依然連絡役に奔命したが、此の事い  
 つか幕府の知る所となり、累を岩倉家に及  
 ぼすことあらんを恐れ、刈谷藩老浜田与四  
 郎他数人の者を岩倉家に入出せしめ、自ら  
 は坂木静江、坂木謙斎等と変名して諸国を  
 浪人した。此の当時妻いとも良く夫三弥を  
 扶けたのである。新政の確立するや、木戸  
 岩倉両家の推輓にて、司法省出仕となり、

次で佐賀及び徳島の裁判長を歴任し、明治  
 十六年内務省に転じ、書記官を拝命、次で  
 三重県大書記官に進み、明治二十三年県令  
 を拝命、其年官を辞し本籍を三重県松阪町  
 に移し、日本最初の衆議院議員に当選し、  
 其の解散せらるゝや、再選されて議員と  
 なった。当時板垣退助と共同して、四国寒  
 川鉦山を経営し、又東京株式取引所の設立  
 に尽し、該会社の理事と成る。次で東京木  
 挽町に歌舞伎座株式会社を創立して社長を  
 勤め、後年越後国長岡に於いて、石油事業  
 に従事した。晩年健康を害し、東京代々木  
 に隠棲し、大正六年二月二十四日腸を病み  
 て没した。時に八十二歳、法号を恭興院殿  
 謙誉守道大居士と言ふ。三弥は資性剛直に  
 て、儉を守り、俠義に富み、号を梧窓居士  
 と称し、壮年より漢蘭の二学に精通し、日  
 常読書に耽り、哲理談論を好むで居た。生  
 前に功有て正六位勲六等单光旭日章を授け  
 られた<sup>(7)</sup>。

この資料3は、「伊藤謙吉氏伝」を基にし  
 ていると思われる。「伊藤謙吉氏伝」は、伊  
 藤三弥の長女那津子が、その遺産を亀城小学  
 校に寄附した際、その弟で三弥の長男である  
 敬三郎が父のことを調べたものである。

この三つの辞典に記述されたことを基に、  
 三弥の人生を検証していく。

まず、三弥の生れについては、資料1の天  
 保7年（1836）3月説、資料2の同年2月説、  
 があるが、三弥の子供が調べた「伊藤謙吉氏  
 伝」には天保7年2月24日生まれとあるので、  
 その説が有力である。

出生地については、資料1は伊予国津市玉  
 置村とあるが、そもそも伊勢国津市の誤植で  
 であろう。資料2は兵庫県出身とある。これら  
 はいずれも間違いで、三河国刈谷生れである。  
 伊勢国津市説は、三弥が三重県松阪から衆議  
 院議員に出ていることからの間違いが生じた  
 ものであろう。

## 2 天誅組前後の伊藤三弥

伊藤三弥の刈谷藩での経歴は次の通りである。最初に、嘉永3年（1850）7月11日大小性御雇勤方御小性見習を命じられ、同6年9月3日江戸在番、同年12月20日御次番兼帯、安政3年（1856）8月8日鑑一郎を三弥と改名、同年12月20日中奥御番、文久元年（1861）5月28日遠慮、同6月27日中小性中奥御番、同2年3月15日大小性加入、同3年7月29日出奔している。なお、安政7年1月15日には荻野流光徳派砲術免許皆伝を受けている。

中山忠光が志士38人を洛東の方広寺に集めて大和拳兵の議を決したのが文久3年8月14日であるので、その半月前に脱藩したのは、大和拳兵を聞いて参加するために脱藩したのは明白である。しかし、安政5年4月下旬に松本奎堂が大坂徳井町に潜居していた際には伊藤三弥もいっしょにいたとされる<sup>(8)</sup>ので、脱藩した時期については文久3年7月29日出奔とされる分限帳の記述より実質的にはそれ以前であると思われる。

文久3年5月、在京の志士たち一同、吉村虎太郎をはじめ10名が討幕義拳の同志を募るため長州へ向かっている<sup>(9)</sup>が、その中に刈谷藩関係者として、松本奎堂・宍戸弥四郎・伊藤三弥の3名の名が見られる。その後は8月14日、京都で決起し、中山忠光を主将に39名の同志が集まった。五條代官所襲撃後、桜井寺本坊で一軍の役割が出されたが、この時の三弥の役割は武器取調方とあり、これは三弥が荻野流光徳派砲術の免許皆伝を受けていたからのことであろう。

三弥の天誅組での行動については、詳細はわからないが、紀州藩がのちに天誅組の変について調査して書き示した「和州一揆浪士名録」に「武器頭取 伊藤三弥 八月廿三日京都へ使者に参夫より不帰」<sup>(10)</sup>とある。南紀徳川史は明治半ばに編纂されたもので、第三

者的な見方で編纂していることもあり、さほど内容には間違いがないように見え、脱走したのではなく、岩倉具視に密命をもっていったかどうかは検討の余地があるものの、使者として京都に向かったと思われる。

また、「島村清(省)吾召捕吟味聞取書」には、「伊藤□(三)弥 八月廿八日京都江使者ニ参未タ罷不返」<sup>(11)</sup>、また「大和戦争日記」には8月26日の項に「石川(市川)清一郎儀夕刻ヨリ郡山探索ト申出、五條ヲ出タル儘ニテ其後終ニ帰ラス伊藤官木(ママ)モ郡山探索トシテ罷出終ニ帰ラス」<sup>(12)</sup>とある。「大和戦争日記」は、「久留米藩士半田門吉というが、また松本奎堂が執筆し、奎堂負傷後、門吉が継続記載したものであると伝えられている」<sup>(13)</sup>とあり、奎堂負傷後というのがいつのことかわからないもののこの部分が松本奎堂が書いたものであるならば、松本奎堂の命をうけて岩倉具視に状況を報告するために脱走したという説は崩れることになる。

一方で、「和州天誅組中山軍記」によると、「武器方丹生谷ニ而植村駿河守召捕 伊藤三弥」<sup>(14)</sup>とある。植村駿河守は高取藩主植村家保であるので、三弥は高取藩によって捕えられたとされる。

これらの史料には、8月23日、26日、28日と三弥が離脱した日は三説あるが、いずれにしても天誅組拳兵の早い時期のことになる。

天誅組を離脱した三弥はどのようなルートで隠れたのかは不明であるが、離脱後、三弥の様子が分かるものに、「形勢の非なるを見るや。独り窃かに軍用金を携えて逃竄し、伊那に來り、装を変じて医と称す。松尾家浪士を養ふと聴き、乃ち妻と共に之に投ず。」<sup>(15)</sup>とあり、すなわち、天誅組を離脱した三弥は信濃国伊那伴野村で女流動皇家で浪士を囲い養っていたという松尾多勢子のもとに妻とともにやってきたという。当時は原遊齋と名乗っていた。松尾多勢子は三弥の身上を聞

いておらず、多勢子の娘が出産のため実家に戻ってきて、具合が悪くなったため、医者と称していた三弥に診療を頼んだところ、三弥は大いに困惑し、医者でないことを白状したという逸話が残っている。松尾多勢子は文久2年9月より翌3年3月の間京都に居り、そのあと伊那に5月に帰っているが<sup>(16)</sup>、この間の三弥との接点はないものと思われる。しかし、多勢子は京都時代の知人として藤本鉄石がいた<sup>(17)</sup>とされることから、三弥は天誅組三総裁の1人藤本鉄石を通じて松尾多勢子の存在を知っていたのかもしれない。

先の三弥が医者ではないことを告白した際、足利木像梟首事件の首謀者で捕吏の目から逃れた角田忠行が多勢子のところにかくまわれており、その角田が、国学と医学を修めた権田直助がいてくれたらよかったのにと皮肉をいいはじめたことに対して、三弥は権田直助のもとで医術を学びたいといい、交流のある多勢子に紹介状を書いてもらって旅立っていった<sup>(18)</sup>。

三弥はすぐさま元治元年（1864）1月に松尾多勢子の夫松尾佐治右衛門の紹介で、権田直助の名越舎へ入門している<sup>(19)</sup>。権田直助は武蔵国入間郡毛呂本郷出身で、号を名越舎といい、漢方医学を学び、その後漢学を修めていた。三弥が入門した時は滞京中であった<sup>(20)</sup>。

この時のことをのちに皇典講究所所（のちの国学院大学）を設立した井上頼圀が元治元年11月に権田直助の許に行った際、三弥がいて漢学に長じて古方家の医書も読んでいたうえに、世上の形勢に精しく常に諸藩の事情などを心得て話していたとある<sup>(21)</sup>。

慶応2年（1866）1月27日には、松尾多勢子の長男松尾誠哉の紹介で気吹舎塾（平田塾）に入門している<sup>(22)</sup>。

『徳育資料第貳編』には次のようにある。

「岩倉家の執事に、三河刈谷の藩士坂木下枝（伊藤謙吉）といふ者あり。大和十津川の義挙に与し、事成らざりしかば、脱走して、

信州の伴野、美濃の中津川等に隠れ、後、名越舎の塾に潜みて、古医道を学びたるものなりけり。この人、両雄の關鍵となり、岩倉家と直助との交情は、いよいよ深きを加へ、日夜、その密議に参与したり。」<sup>(23)</sup>。また、権田直助と落合源一郎が、慶応4年2月、岩倉具視の密命を受け、関東地方の探索にあたっているが、この権田の派遣について、岩倉具視へ斡旋したのは、三弥であったとされる<sup>(24)</sup>。三弥は松尾多勢子に匿ってもらい、次に武州入間郡毛呂本郷の権田直助のところに滞在し、機を見て上京、岩倉に近づいた<sup>(25)</sup>としている。

三弥と岩倉具視との接点であるが、資料3には、安政6年に三弥はいとを嫁とし、父の死後刈谷を立退いて上京し、妻は豊岡卿随資に仕え、三弥は岩倉村に蟄居の時、岩倉邸に仕えて志士との連絡役をしていたとある。これはそのままとると、脱藩後上京して妻は豊岡卿に仕え、三弥は岩倉邸に仕えて天誅組の乱を迎えたともとれるが、これには矛盾が生じる。

大蔵卿との関係について、天誅組挙兵前の文久2年8月16日、豊岡随資等13名が連署して、関白近衛忠熙に、岩倉と久我建通等が幕府と通謀したという弾劾文を提出している<sup>(26)</sup>ことから、敵対する人物に妻いとを通じて三弥が岩倉具視に近づいたとは考えにくい。また、慶応3年10月28日付岩倉具視あて伊藤謙吉書状に、「大蔵卿之内に罷在候荊妻いと、申者江」<sup>(27)</sup>とあり、伊藤謙吉の妻いとが大蔵卿に仕えていたとある。これは、豊岡卿を通じて岩倉に紹介をしてもらったのなら、このようなことを書状に書く必要がないことから、三弥と岩倉の関係は豊岡卿を通じての関係ではないと思われる。

竹中氏は岩倉具視との関係は、『岩倉具視関係文書八』でみる限り慶応2年10月2日の書状が最初である<sup>(28)</sup>としているが、日記には慶応2年8月17日に「坂木来状」とあ

る。慶応2年の岩倉具視の日記としては、岩公幽棲日記として慶応2年5月13日から6月20日のものがあるが<sup>(29)</sup>、これには坂木の名前は出てこない。このことから、三弥は権田直助の名越舎に入門したあと、慶応2年1月27日に気吹舎（平田塾）に入門し、京にいる岩倉に近づいたもので、その時期は慶応元年の6月下旬から8月上旬の間ではないかと考えられる。

一旦関係を持つと何度も書状のやりとりをし、そして岩倉のもとへ出かけており、9月9日には坂木が岩倉のもとにやってきて、「風聞を色々噂」<sup>(30)</sup>とあり、情勢を報告していることがわかる。つまり、その後の二人の関係は急速に、かつ親密な関係になっていった。

松吉氏は、三弥が岩倉具視に重用されるようになったいきさつはあきらかではないとするものの、おそらく松尾多勢子の斡旋によるものであり、その時期は慶応2年頃だと推定されるとしている<sup>(31)</sup>。しかし、松尾多勢子が岩倉具視に初めてあったのは、明治元年初頭であるとされる<sup>(32)</sup>ことから、松尾多勢子が三弥を岩倉具視に引き合わせることはありえないだろう。

これらの天誅組での三弥について、刈谷出身の書誌学者森銃三氏は、その著『松本奎堂』のなかで、「飯山は文の末尾に於いて、伊藤三弥をも烈士としてこれを遇しているが、三弥は義拳に加わりながら、八月二十六日に早くも脱走しており、奎堂と終始行動を共にしなかった。そして三弥は後に、奎堂の密旨を受けて、岩倉卿へ使した由であるが、奎堂が岩倉具視と何等かの連絡を持っていたかどうかは疑わしい。それは恐らく三弥の弁明に過ぎなかったであろう。飯山の称褒は当然だが、しかし三弥は軽輩であった。その脱走の如きも、深く咎むべきではないかも知れない。」<sup>(33)</sup>としている。これが伊藤三弥に対して評価された一番古いものである。森銃三は三弥の離脱を8月26日としていることか

ら、「大和戦争日記」を参考にしていると考えられ、「奎堂の密旨を受けて岩倉卿へ使した」としたのは、「伊藤謙吉氏伝」によるものであろう。また、一部の地元民が松本奎堂は死をもって目的を成就しようとした英雄であり、三弥は途中で逃げた卑怯者であるとの言い伝えが残っており、このことを踏まえて森銃三氏が書いたものと思われる。

これらの記述をもとに松吉武雄氏は、「彼（三弥）のその後の動静をみても、状況に応じて身を処することには敏感であり、また状況を探知する能力には秀でているところから推察すると、天誅組が高取城を攻撃する前後からすでに挙兵の失敗を予感したうえでの脱走であろう。」<sup>(34)</sup>としているが、これはあくまで推測の域を出ないものであろう。

しかし、三弥の天誅組からの離脱の状況が詳細に解明されないものの、その後に岩倉と親密に関係をもって目的を果たそうとしていることに目をつけなければならない。つまり、森氏の記述が現在まで伊藤三弥の低い評価につながっていることについて疑問を感じるとともに三弥の再評価をする必要があるものと思われる。

### 3 三弥の復藩

慶応2年になると、伊藤三弥と岩倉具視とのやり取りが盛んにみられる。当時三弥は坂木静枝と名乗っていたが、岩倉具視日記<sup>(35)</sup>によると、8月17日に「坂木来状」、18日に「坂木入来」、22日に「坂木より書状来」などあり、少なくとも慶応2年8月の時点では三弥と岩倉具視の関係は、手紙だけでなく、三弥が岩倉具視宅へと出入りしており、相当親密な関係であったことは間違いのない。

慶応4年3月に出された刈谷藩の史料に次のようにある。

坂木静枝

先年当藩脱走致し候処、兼而勤 王之志有之趣相聞、且対旧藩為報效致尽力候段令満足候、依而存寄之品茂有之候ニ付、今般帰藩格式槍奉行申付、新知八十石差遣候  
三月<sup>(36)</sup>

当時勤王派として刈谷藩では慶応4年3月9日に大家老に任命された浜田与四郎とその子篤蔵が家老になっており、この史料が浜田家に残っていることから、刈谷藩復藩について浜田与四郎及び篤蔵の尽力、または推薦があったと考えられる。

このように三弥は慶応4年に復藩しており、明治3年11月に刈谷藩では官員の任命替えが行われた際には、正権大属として伊藤謙吉の名前が見られる<sup>(37)</sup>。このことから、刈谷藩として三弥を認めていたと思われる。明治元年9月26日には願いにより本性伊藤に改め、静枝を謙吉と改名している。また、『分限帳』<sup>(38)</sup>によると明治3年11月7日商法掛りを命じられ、御用済み次第東京へ出府し、御用取り扱いをしたとある。それを示すように、明治3年3月、三河国為替会社を設立するために作られた「三河国為替会社組合連名帳」<sup>(39)</sup>には、刈谷町岡本精四郎ほか62名があり、その表紙には東京為替会社附属刈谷会社発起人として、竹本要右衛門とともに坂木謙吉が連名で書かれている。同年6月には、東京為替・通商両会社の出張所を建てているが、その際の「商社願建一件書」<sup>(40)</sup>には、「道中無滞五月二日品川宿江着致候所、坂木謙（謙）吉殿事為出迎御出張有之、今般願立之件々を示談申述」とあり、坂木謙吉が商社取り建てに関わっていることがわかる。

ちょうどこのころ、「去ル明治三年、商業財本之為メ金子拝借仕」<sup>(41)</sup>とあるところから、伊藤三弥は商社を作るのに岩倉具視から借金をしていたことになる。この借金は明治七年になってもまだ返済することはできず、この年内に返済する旨を告げている。

このあと、「伊藤謙吉氏伝」には、明治4年再び刈谷を出て横浜越後屋に寄宿し、三井の番頭三野村利左衛門の恩顧を受け、下総国習志野開墾に従事するが、失敗して東京猿江で醤油醸造を営んだとある。この経緯について裏付け資料は見出せないが、明治3年6月の「商社願建一件書」に、岡本精四郎等が上京して謙吉の仲介で三野村にあったとあることから、謙吉と三野村との関係があることがわかる。しかし、習志野開墾、いわゆる小金原開墾は明治2年に始まっている。したがって、明治3年の時点で、謙吉と三野村との何らかの交流があり、明治4年に横浜越後屋に寄宿し、三野村の恩恵を受けて習志野開墾に従事して、明治5年に商売のために横浜に移るとするのは時間的に難しい。このため、習志野開墾には従事していないものと思われる。

このあとの伊藤謙吉に関しては詳細が不明であるが、その足跡をたどるのに次の史料がある。

神奈川県管轄

武州久良岐郡

横浜第二区五拾八番地

商業

坂木健蔵

右同人方へ商業ニ付寄留仕度、此段御届申上候

(明治5年)

壬申三月十五日

額田県貫属士族

三河国碧海郡刈谷郷

伊藤謙吉<sup>㊦</sup>

第二大区内

第六小区

戸長御中

右障礙之筋無之候也

三月十五日 第六小区

戸長 天野三吾<sup>㊦</sup>

第二大区  
戸長  
御中  
右之通相違無之候也  
壬申三月十五日  
第二大区戸長  
木邨琢磨<sup>㊟</sup> <sup>(42)</sup>

坂木健蔵はおそらく親戚筋もしくは兄弟かと想像されるが、その人を頼って商売をするために横浜に出て行ったと思われる。しかし、伊藤謙吉が坂木健蔵を名乗っていたという資料もあり、その関係は釈然としない。

その後について、明治7年になると、佐賀県で名前が出てくる。

明治七年四月二十四日 庶務課  
裁判所被置候ニ付三課へ達案  
県下今日ヨリ裁判処被置候及庁中聴訟課  
相廢候、此段相達候事  
庶務課（野村惟章権参事  
伊藤謙吉七等出仕）  
租税課（野村権参事）  
出納課（伊藤七等出仕）<sup>(43)</sup>

このほか、「奏任官履歴」には次のように履歴が残っている。

（表紙）  
「 明治九年一月  
奏任官履歴  
往復係 」  
履歴書

東京府平民  
伊藤謙吉  
八年八月  
三十九年六ヶ月

一明治七年四月三十日  
補七等出仕 佐賀県  
一明治七年七月十四日

就御用上京  
一同年八月十四日  
御用済帰県  
明治八年六月五日  
一地方官会議御用ニ付上京  
同年八月十七日  
一依願免出仕  
右之通候也  
明治八年八月十八日  
元佐賀県七等出仕  
伊藤謙吉<sup>㊟</sup>

（貼紙）  
「<sup>㊟</sup><sup>㊟</sup>伊藤謙吉」<sup>(44)</sup>

これによると、明治7年4月30日に佐賀県に七等出仕として任命され、翌年8月17日に辞任するまで佐賀にいたことになる。佐賀裁判所は明治7年4月5日に設置されており、これは、明治7年2月に起きた江藤新平・島義勇らをリーダーとして、明治政府に対する士族反乱の佐賀の乱の事故処理のために派遣されたものである。

佐賀県における伊藤謙吉は、明治8年6月20日から7月17日にかけて東京で開催された地方官会議に県令北島秀朝の代理として出席している。この時の佐賀県令は北島秀朝で、北島は京都で岩倉具視の庇護を受け、諸藩の志士と交わり、尊皇攘夷運動・倒幕運動に参加し、明治元年10月23日東京府判事となり、開墾局知事を兼務し、明治3年7月に東京府大参事、明治5年1月に和歌山県権令、明治7年4月に佐賀県令となっている<sup>(45)</sup>。

酒井家文書に、明治8年4月24日付け酒井利亮書翰案文の宛先には「嵯峨県伊藤三弥殿」とあり、明治8年5月8日付け酒井利泰書翰には「最早嵯峨県江出立ニ相成、内室ハ横浜ニ居候」<sup>(46)</sup>とあるところからも伊藤謙吉が佐賀県にいたことと一致する。

このあと東京に戻り、明治9年4月の「明治官員録」に東京上等裁判所伊藤謙吉と名前

が見られる。また、酒井家文書には次のようにある。

謹賀新年併祝後來之万福候、さて既住ハ法外之御疎遠ニ打過候段多罪御海函是祈候、御賢息様御帰郷既ニ閏年ニ及候、益御健ニ御勤業之御儀と奉存候、老兄御病氣ハ如何ニ被為在候哉、是又相何度小生儀者〔 〕業上大ニ損失ヲ受ケ、御賢息様御光来之際営業罷在候深川醤油製造器械家屋共搦テ売払ひ仕法相立テ、其後所々ニ寄寓現今ハ東京府下北豊島郡金杉村五十八番地ニ寓居罷在候、小生も一度貴国辺へ罷出度存候得共、仕官之身分遠行心ニ任せず、空しく経過罷在候儀ニ御坐候、其後尊家御営業之御模様ハ如何ニ被為在候積善余計之天恵宅而追而御復旧之御儀と察上居候儀ニ御坐候、先者年甫之御嘉詞迄早々如此ニ御坐候、頓首再拝

一月四日（明治11年）

伊藤謙吉

酒井老盟台

侍史

二白追日寒威相増候折角御加養専一ニ奉祈候、乍末御家内皆々様方へ宜敷御祝詞奉祈上候、早々<sup>(47)</sup>

ここにある「御賢息様御光来之際」とあるのは、酒井利泰が東京に出て、謙吉のところへ訪ねて行った時のことで、これは明治8年5月のことである。この時には深川で醤油製造を行っていたことになる。しかし、同時期には佐賀裁判所へ出向しているので、明治5年に横浜に行った後すぐに深川で醤油製造業を始めたものの、司法省に入って佐賀県に出向したために醤油製造もままならず、その後佐賀から戻って東京上等裁判所で判事として勤めることから廃業したと思われる。

資料2には佐賀始審裁判所所長を勤めるとあるが、佐賀始審裁判所が出来たのは明治

14年10月であり、謙吉が佐賀に行ったのは明治7年であることから、佐賀裁判所に出向したことを間違えたのだろう。

酒井利泰が深川にいる謙吉に会い、金を借りたとあるが、佐賀県庁文書にあるように明治7年7月14日にいったん上京し、8月14日に佐賀県に戻っていることからその間のことである。

#### 4 政治家・実業家の伊藤謙吉

明治9年になると、謙吉は東京上等裁判所に勤務することになる。明治11年から14年2月までの「明治官員録」には東京上等裁判所判事とある。その後は明治14年10月15日から明治17年4月20日まで徳島始審裁判所所長として出向している。その後戻ってからは再び東京上等裁判所に勤務したものとされるが、明治18年1月17日には判事として大審院刑事局詰を命じられている。

明治18年7月27日には司法省から内務省に移り、内務少書記官に転じる。明治18年9月1日には内務少県治局第一部長心得少書記官とある。明治19年1月11日には内務少書記官を解かれ、翌日には三重県大書記官に任命されている。

三重県では、明治19年1月12日から明治19年7月20日まで大書記官、明治19年7月31日から明治20年5月4日まで書記官を勤めている。書記官というのは明治19年7月20日勅令五四号により職名が変更されたものである。当時は県令（明治19年7月20日より知事）がおり、その次のポストが大書記官であることから三重県でNo.2のポストをつとめていたことになる。明治19年9月18日には会計主務官に命じられている。明治22年4月15日付で、気管支加答児症のためという理由で辞職願を提出、4月29日に辞職許可を得ている。

辞職後は、明治22年7月12日に開かれた

斯友会総会に出席し、評議員に選ばれ、また11月6日に開かれた斯友会総会で、第二期役員議員10名のうち選ばれている。しかし、11月27日には三重倶楽部結成の会合に出席している。

その翌年7月1日に行われた第1回衆議院総選挙では、三重県4区（多気・飯高・飯野郡）から立候補して当選、明治25年2月の第2回衆議院総選挙にも立候補して2回目の当選を果たしている。このような動きをみると、三重県書記官を辞任したのは、衆議院選挙出馬を見越しての辞任であったようだ。

衆議院議員となった伊藤謙吉ではあるが、突然明治26年4月に任期途中で辞職してしまう。これは、地元有志から謙吉の選挙活動での言動とその後の言動が矛盾していると追及され、ついに辞表を出してしまう。これで政府役人、政治家としては終わる。

ちょうど衆議院議員となった明治22年頃、愛媛県寒川鉱山の鉱主となっている。採掘が始まったのは明治13年で、明治22年以降2、3年間はすこぶる隆盛であったとされる<sup>(48)</sup>。寒川鉱山その後採掘量が次第に減り、明治29年ころにはやむなく休山となっている。いつから伊藤謙吉が鉱主となったかはわからないが、採掘者ではなく、投資目的での鉱主であったのだろう。

衆議院議員を辞職した後、伊藤謙吉の名前が見られるのは、太田鉄道の株主としてである。太田鉄道は、明治25年7月に常北馬車鉄道会社が発展的解消をして設立されたもので、明治30年に水戸—久慈川間の営業を開始している<sup>(49)</sup>。太田鉄道株式会社取締役については、明治26年12月9日の太田鉄道延長布設発起人の22名の中には名前がみられないが、明治28年1月18日の第2回臨時株主総会議事録第2号の中の90人の出席株主の中に名前がみられる（第1回臨時株主総会議事録が残されていないため、当初から株主であったかは不明）。また同年12月7日の第

5回臨時株主総会議事録の中に71人のうちに名前がみられる。そのあと明治29年2月21日の太田鉄道株式会社職員録の中には名前はない。しかし、明治31年2月13日付け「いはらき」新聞にみられる第八回報告において、取締役4人のうちに名前が見られる<sup>(50)</sup>。明治32年8月に営業不振のために株主間に内紛がおこり、取締役全員が責任を追及されて辞任してしまった。これらのことから当初は株主として関わった太田鉄道ではあるが、のちに取締役までなったのではないかと思われる。

その後は歌舞伎座で名前がみられる。歌舞伎座は明治29年4月8日に創立総会が開かれ重役選挙が行われ、会長に皆川四郎、副会長に井上竹次郎が選ばれているが、その際謙吉は重役・監査役・幹事には選ばれていない。その後明治29年9月1日に歌舞伎座株式会社と改組し、10月5日で歌舞伎座株式会社の役員会で社長皆川四郎、副社長に井上竹次郎がそのまま就任しているが、その際に取締役に就任している<sup>(51)</sup>。この取締役就任について、社長皆川四郎の推薦であった<sup>(52)</sup>。皆川は明治9年に代言任免許を取得していることから、当時東京上等裁判所の判事として勤務していた謙吉とはその関係で面識があったのかもしれない。また、副社長となった井上竹次郎は、はじめ炭鉱株、次いで東京株式取引所の株を仲買を通さず直接扱う株商であるというから、株主仲買商として、謙吉と井上は面識があったことも考えられる。

「歌舞伎座株式会社仮定款」によると、取締役は所有株50株以上、監査役は30株以上の株主から選挙する<sup>(53)</sup>とあることから、伊藤は当初から株主であったと考えられる。この当時『歌舞伎新報』一六一六号には株式仲買商とある<sup>(54)</sup>。その後同年12月1日に皆川社長の突然の辞任により役員変更があり、この時社長に就任している<sup>(55)</sup>。この皆川の社長辞任について、謙吉が関わっている。11月

22日に謙吉から書状3通がきて、その内容は会社が第三銀行へ預けている5万円を皆川が不正に引き出して仕込み金にしたとの疑惑が書かれていた。これは銀行からの借入金であると説明して解決したが、12月1日に疑惑を受けて立腹した皆川が辞任したという経緯がある<sup>(56)</sup>。これには皆川の推薦を受けて取締役になった謙吉が1か月半でその皆川の疑惑を訴えたことになる。このいきさつについても謙吉の正義感・一途な性格を表している。明治32年1月に歌舞伎座の内紛によって辞任している<sup>(57)</sup>。

このほかの伊藤謙吉の経歴には、資料2には「東京株式取引所理事となる」とあり、資料3には「東京株式取引所の設立に尽し、該会社の理事と成る」とあるが、『東京株式取引所五十年史』<sup>(58)</sup>をみてみてもその名は見つけられない。間違いであろう。

また、資料3には「越後国長岡に於いて石油事業に従事した」とあるが、これについては関係を見出すことはできなかった。しかし、長岡での油田開発者としては名前が見られないことから、関与しているならば、株主としての投資であろう。

このほか、資料1には神戸商品取引所監査役とあるが、そもそも神戸商品取引所自体の実態がないことからこれも間違いであろう。

明治28年小川村（現東吉野村）で、天誅組殉難士三十三回忌法会が行われることになり、招待者の1人に伊藤謙吉の名が見られるが、どうやら参列していないようである。これからも伊藤謙吉が天誅組のことは避けているような感じが感じられる。

晩年の伊藤謙吉について、1点だけ資料が残っている。

(封表)

「三河国碧海郡刈谷町  
浜田篤蔵様  
貴酬

消印

東京 三河  
月一一年二廿 刈谷  
日六 月一一年二廿  
日六

(封裏)

「封 東京芝公園第十六号

伊藤謙吉 ）」

華墨拝見仕候、如貴詠甚寒之候、益答御清福被為涉奉恭賀候、過般御上京之際ハ不得止取込事件有之、失敬仕候段御海容是斯候、奎堂先生建碑一件二付、綏々御白之趣拝承御心中御察し申上候、先般委員大野・浅井両氏より岡先生住所之事及題額二付、親王家又ハ近衛公爵之照会有之及回答候、貴白ノ内広ク貴権紳士之候、是ハ小生之力之及不限り無之、何トナレハ小生ハ近時ハ市中ニ在リ乍ら純然隠遁之身にして候、更ニ社会ニ交際不仕候得者到底不及事ト信じ申候、乍併可及的之事ハ尽力可仕精神ニ有之候間、名分之事ハ被仰聞度、貴白ニ依レハ織田氏之云、且委員諸氏より岡先生之宿所問合ニ依レハ織田老草稿ハ全ク御廢シニテ他人ニ撰文御託しと被察候、過日之御咄シニ依レハ中山侯ニ付何れ織田氏ト関係有之哉ニ相伺候、元來委員ト中山侯ノ仲間ニ織田氏相立チ候様之事実ニても有之候哉、実ハ過日之御咄ニ依レハ岡先生之草稿ハ中山侯之名義ナリ、碑文ニハ不適當之様ニも被考、又大家先生か一度立稿御在テ更ニ文草之仕組より変更為致候事ハ困難ナルヘク、故ニ或場合ニ至レハ撰文之名義被及申候、立稿在共ニ更変致さねすならぬ事ニハ立至リ申間敷哉、其辺ハ過日織田氏殘地ニ被參候節情悦ニテハ如何候相成居候処、又親王家又ハ他公爵之題額ニ付而も撰文之方定り候上ニ無之而ハ御出しも出来難ク又小生ハ共辺ニ手蔓とてハ無之候得共、俄其場合ニ臨ミ候得者、乍不及尽力可仕覚悟ニ御座候、先ハ右迄、草々

一月五日

謙吉再拜

浜田老賢台

侍史<sup>(59)</sup>

明治25年、刈谷士族会により松本奎堂の旧屋敷跡に碑を建てる計画が立ち上がり、その際碑文を当初織田完之が書きことになっていたが反対意見が出て、結局旧仙台藩士で松本奎堂の旧友であった岡鹿内が書いているが、その誰に書いてもらったらいのかと浜田篤蔵が伊藤謙吉に聞いている。これに対し、謙吉は「小生ハ近時ハ市中ニ在リ乍ら純然隱遁之身にして候、更ニ社会ニ交際不仕候」としながらも、協力はすると言っていることに謙吉の置かれた立場を窺い知ることができる。

## おわりに

伊藤三弥の経歴を追ってみてきたが、そのうえで数々の三弥の性格等もそのなかにみえてくる。

まずは天誅組の前後、そのあとからも一貫して幕府を倒し、天皇中心の政治社会を造るという事は意志が働いたかはわからないが、その後、松尾多勢子を通じて権田直助（名越舎）、平田塾（気吹舎）、そして岩倉具視に近づくとといったある意味で世を見越した行動をとっている。それがきっかけに司法省に取りたてられ、政府役人、そして三重県での政治家生活、ついに衆議院議員としての政治家生活を送ることになる。衆議院議員を辞職したのも自分の信念のもととった行動を選挙区民から異議を申し立てられ、追い込まれていったという事件も起きている。

その後は投資家として、そして実業家として多くのことに携わっている。しかし、一貫して天誅組志士としての存在はひた隠しにしている感がある。これはどのような事情であ

れ、最後まで同志とやり遂げられなかったことにどこか心の奥にしこりが抜けきらなかったのではないだろうか。

まさに長男健三郎が述べている剛直で俠義という言葉が行動に出ている様である。

## 註

- (1)刈谷市史編さん委員会編『刈谷市史』第二巻、刈谷市、1994
- (2)松吉武雄『天誅組残照（その一）』、維新草莽史研究会、1999
- (3)山田孝「伊藤三弥像を求めて（一）」『かりや』第22号、刈谷市郷土文化研究会、2001
- (4)竹中兼利「岩倉具視関係文書にみる伊藤謙吉」『かりや』第33号、刈谷市郷土文化研究会、2012
- (5)日本現今人名辞典発行所編『明治人名辞典Ⅱ』上巻、い之二十八、日本図書センター、19988、※句読点については筆者が適宜つけた
- (6)衆議院・参議院編集『議会制度百年史（衆議院議員名鑑）』、大蔵省印刷局、1990、44頁
- (7)愛知県教育会編『新編愛知県偉人伝』、愛知県郷土史料刊行会、1979、336頁
- (8)刈谷市郷土偉人調査研究会編『松本奎堂略年譜』、刈谷市郷土偉人調査研究会、1961、4頁
- (9)『維新の魁天誅組』、『維新の魁・天誅組』保存伝承・顕彰推進協議会、2008、7頁
- (10)『南紀徳川史』第三冊、名著出版、1970、577頁
- (11)東吉野村史編纂委員会編『東吉野村史』史料編上巻、東吉野村教育委員会、1990、1187頁
- (12)日本史籍協会編『野史臺維新史料叢書』三十一、東京大学出版会、1973、6頁
- (13)日本史籍協会編『野史臺維新史料叢書』三十一、東京大学出版会、1973、320頁
- (14)草村克彦氏蔵
- (15)市村咸人『市村咸人全集』第五巻、下伊那教育会、1980、134頁
- (16)市村咸人『市村咸人全集』第五巻、下伊那教育会、1980、462～463頁

- (17) アン・ウォルソール『たをやめと明治維新』、ペリかん社、2005、231頁
- (18) アン・ウォルソール『たをやめと明治維新』、ペリかん社、2005、248頁
- (19) 権田直助『国文句読法』、栄光出版社、1986、129頁
- (20) 権田直助『国文句読法』、栄光出版社、1986、129頁
- (21) アン・ウォルソール『たをやめと明治維新』、ペリかん社、2005、249頁
- (22) 平田篤胤全集刊行会編『新修平田篤胤全集』別巻、名著出版、1981、92頁。『たをやめと明治維新』によると誠とある。
- (23) 埼玉県教育会編『徳育資料第貳編』、埼玉県立浦和図書館、1980、86～87頁
- (24) 長谷川伸『長谷川伸全集』第七巻、朝日新聞社、1971、221頁
- (25) 長谷川伸『長谷川伸全集』第七巻、朝日新聞社、1971、224頁
- (26) 大久保利謙『岩倉具視』、中央公論社（中公文庫）、1990、125頁
- (27) 日本史籍協会編『岩倉具視関係文書三』、東京大学出版会、1983、376頁
- (28) 竹中兼利「岩倉具視関係文書に見る伊藤謙吉」『かりや』第33号、刈谷市郷土文化研究会、2012
- (29) 日本史籍協会編『岩倉具視関係文書二』、東京大学出版会、1983
- (30) 日本史籍協会編『岩倉具視関係文書一』、東京大学出版会、1983、55頁
- (31) 松吉武雄『天誅組残照（その一）』、維新草莽史研究会、1999
- (32) アン・ウォルソール『たをやめと明治維新』、ペリかん社、2005、277頁
- (33) 森銑三『松本奎堂』、電通出版社、1943、353頁、のち中公文庫にて改装版発行
- (34) 松吉武雄『天誅組残照（その一）』、維新草莽史研究会、6頁
- (35) 日本史籍協会編『岩倉具視関係文書一』、東京大学出版会、1983、43頁
- (36) 浜田篤二家文書
- (37) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史』第三巻、刈谷市、1993、8頁
- (38) 刈谷古文書研究会編『分限帳』、西村書房、1998
- (39) 刈谷市史編さん編集委員会『刈谷市史』第七巻、刈谷市、1990、110～114頁
- (40) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史』第七巻、刈谷市、106～110頁
- (41) 竹中兼利「岩倉具視関係文書にみる伊藤謙吉」『かりや』第33号、刈谷市郷土文化研究会、2012
- (42) 刈谷市教育委員会編『刈谷町庄屋留帳』第二十巻、刈谷市、1988、159頁
- (43) 佐賀県警察史編さん委員会編『佐賀県警察史』上巻、佐賀県警察本部、1975、190頁
- (44) 佐賀県明治行政資料（佐賀県立図書館蔵）
- (45) 柏市編さん委員会編『柏市史』近代編、柏市教育委員会、2000、179～180頁
- (46) 塚本弥寿人「眼科医酒井利泰の横浜からの書簡」『愛知大学総合郷土研究所紀要』第59輯、愛知大学総合郷土研究所、2014
- (47) 三好町酒井家調査団編『酒井家文書（四）』、三好町、2003、48～49頁、本書では年代不明としているが、『みよしの`イ`人酒井利泰』（みよし市立歴史民俗資料館、2013）では、利泰帰郷（明治9年）後2年とあることから明治11年のものとしている。
- (48) 伊予三島市史編纂委員会編『伊予三島市史』下巻、伊予三島市、260頁
- (49) 常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史』通史編下、常陸太田市、1983、275～276頁
- (50) 生田目靖志「太田鉄道敷設経過における二、三の問題点」常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史』余録1、常陸太田市史編さん委員会、1975、27頁
- (51) 歌舞伎座編『歌舞伎座百年史』本文篇上巻、松竹、1993、95頁
- (52) 木村錦花『近世劇壇史』、中央公論社、1936、122頁
- (53) 寺田詩麻「歌舞伎座株式会社の設立」『演劇研究センター紀要』Ⅲ、2004
- (54) 寺田詩麻「歌舞伎座株式会社の設立」『演劇研究

センター紀要』Ⅲ、2004

55)歌舞伎座編『歌舞伎座百年史』本文篇上巻、松竹、  
1993、96 頁

56)木村錦花『近世劇壇史』、中央公論社、1936、  
124 頁

57)歌舞伎座編『歌舞伎座百年史』本文篇上巻、松竹、  
1993、107 頁

58)『東京株式取引所五十年史』、東京株式取引所、  
1928

59)浜田篤二家文書

